

五十周年記念誌によせて

宮内幸男

一九五七年九月、わらじの仲間は創立された。まだ二十歳代前半の若者たちが沢山の夢を抱えて集つたと聞く。その後、夢を同じくする仲間たちが集い、研究し、議論をして、悩んで、ひたむきに山に向かつたことだろう。舞台から退くものがあれば、あらたに参入する者がいた。一旦しりぞくも再び現れる者がいた。居るんだか居ないのか曖昧な者もいただろう。幾つかの山岳会を渡り歩く者もいた。何時まで経つても退場しそうにないしぶとい者もいた。山のついでに生涯の仲間を得て仕合せな家庭を築いた者もいた。誰もが自分の山を模索し夢を実現しようとした。その関わりの密度にはおのれの濃淡があつたろう。だが、そんな一人ひとりがこの会を支えた。そうやっていつの間にか五十年が経つて、今日に至つた。

山だけを接点にした集まりが、こんなちっぽけな町の山岳会が、もちろん様々な消長はあつたにしても、消滅することなく半世紀に亘つて持続した。これだけで奇跡といつてい稀有な出来事だと私は思う。そこには様々の苦労や挫折があつただろう。でも誰かがその度に踏ん張ってきたからこそ現在がある。冒頭、あえて悩んで、と記した所以だ。

一口に五十年という。その長きに亘つて全てを知つてゐるのは、いまや創立会員の関根幸次氏ひとりだ。かくいう私は、その後ずっと下つて一九七五年にこの会の仲間となつた。私もまたいつの間にかその半分以上の歴史に付き添つてきたことになる。今年もまた嬉しいことに新しい仲間が増えて元気に山に向かつてゐる。いつか成長して今度は彼・彼女らがまた新しい仲間を育てていくだろう。そうやつて会は続いてきて今日を迎えることができきたのである。

その活動は堅実なものだつた。耳目を驚かす超人的な活躍もなければ初登攀もない。目立たぬ山域の谷や尾根を飽きもせぬ日々と廻つて來た。その活動になにがしかの特長があるとすれば、なによりも山域にとことん拘つてきたことだ。これはいまや組織的な対応というよりむしろ個人プレーの觀を呈してはいるが、それは登山の本来あるべき姿だと思う。誰もがそうでなければならぬなどと言うつもりはないが、自らのハイマートを持つこと、一人ひとりがそれぞれの心の山を堅持すること、これは山を目指すものにとつて夢であり憧れであると思う。そのうえで、志を同じくする仲間が力を合わせて特定の目的に取り組んでいけるならば、感無量、私ならもうなにも要らない。

一九五八年五月以来毎月の活動報告たる月報が一度として途切れることなく発行され続けてきたこと、たぶんこれも自慢に値することだろう。現在は通算六一九号（二〇〇七年十月現在）を数える。我が家のある三十数冊に及ぶ古ぼけたファイルは、家人からいくら邪魔だと言わざるを得ないのだが、私にとつては何物にも代えがたい宝物である。いまや外注印刷に出している月報だが、かつては手をインキだらけにして輪転機と格闘していた。集会の前日、若林岩雄宅に泊まりこんで徹夜でやつた作業など

今となつては懐かしい。

また、一九七九年度以降、会活動年度報告書（年報）が発行され続けていることも自慢していいことのひとつだらう。それ以前は十年毎にまとめられ、年報一、年報二として出している。また別に合宿報告として叢書を発行していただが、これは私もほとんど知らない世界に属する。これら会報の発行は、いうまでもなくその存在意義を会員の一人ひとりが自覚して会務に携わってきた賜物である。

会運営についても同様で、確かに一人のスーパースターもカリスマもついて生みだすことはなかつたが、さいわいにその時々に中心的な役割を担う者が自ずと、しかもうまい具合に継起的に、現れては代替わりを進めてきた。代表とかリーダーとか編集長とか幾つかの役職に名前を連ねた者があれば、そうでない者もあつたが、これもまた、その誰もが会を支え育ててきたのである。特筆すべきは、長期間に亘つて事務局を引き受けてくれ、今も続けていてくれる、古くは関根幸次家、現在は田中茂雄両家の一家を挙げての献身的な協力についてである。毎週末の数パーセンの下山報告、それがいつ果てることなく、何時までもつづくのである。これを一手に引き受けることなど一体誰ができるだらうか。その手間、心労とも並大抵のことではないはずだ。いまさらながらではあるが、あらためて両家に対し、深甚の感謝を捧げたい。

むろんこの五十年は、喜ばしいことばかりではなかつた。楽しいはずの山行のなかで死亡事故を繰り返し起してしまつて。私たちはその都度、重大な反省と再発防止の固い決意を重ねてきた。だが、重大事故は止まらない。五十年間で八人という、あまりにも多くの仲間を私たちに失つてゐる。犠牲を払わなければ達成できない活動などないし、あつ

てはならない。これ以上の仲間を山で失ってはならない。この五十年という記念の年は新たな決意を示す節目の時でなければならない。

この会は一体どういう会なのか。世人に沢登りの会だと言われ、そう宣言する仲間も確かにいる。だが、すくなくともわたし個人はそう思つたことはないし、そういう会でないと考えたこともない。山は総体として楽しむ世界である。四季おりおり様々な登り方をしてみて判るものがある。美しく穏やかな空間があれば人を寄せ付けない険悪で危険な地帯がある。落ち着いてあらゆる状況に対処できる技術と経験を積んで、はじめて到達できる世界がある。そのときにやつと心に浮かぶ何かがある。そのためには、時代遅れの表現かつ定義抜きで乱暴だが、いわゆるオールラウンドな山との付き合い方がやはり大切だ。特定の、決まりきつたことばかりをいくら繰り返していても、どんな所でも自由自在に歩き回れる本当の技量は身に就かないと思ふ。

これからこの会はどうなっていくのか。これまでのよう曲がりなりにも世代交代が続くのか、誰か取りまとめ役が登場してきて仕切つていくのか、伝統や経験というべきものがあるとしてそれらが受け継がれあるいはさらに発展していくのか、それは誰にも分からぬ。わらじの仲間の五十年、そこに何を見るのか、さらにその先に何が見えるのか。懐古趣味もいい。振り返ることさえしないのもいい。そんなこととは無関係にただ山に遊ぶのもいい。それは、会に関わる一人ひとりにかかっている。一人ひとりがやりたいようにやる。それが一番だ。そのうえで、ひとつひとつ支流がいつか一本の流れとなつて、大河にでもなることがもしあれば、これほど嬉しいことはない。



北アルプス・鹿島槍ヶ岳天狗尾根 1966年1月

第一章 座談会 わらじの仲間の半世紀から見えるもの

第二章

歴代代表・チーフから 人が時代を創り、時代が人を創った

回想・わらじの仲間
五十年の断片 繰るがままに

地域研究と合宿

沢登りの変遷とわらじ

飯豊連峰の谷と雪尾根

越後の山から、黒部別山そして剣へ

第三章

宮 大若 金 関 口
内 津林 子 一郎 次 人
幸 政 岩 雄 郎
男 雄 雄

五年リレーでつなぐ 世代に違う活動記録 後継者たちの系譜

一九五七年（一九六二年）

わらじの仲間「一九五七（一九六一）『忘れ残りの記』」

永瀬保夫



南アルプス・尾白川本谷 1972年10月

一九五七年～一九六二年の記録より

四十五年前の思い出 夏合宿・未丈ヶ岳集中——一九六二年七月

大蛇尾紀行

一九六三年～一九六七年

創立期から成長期へ。那須山塊から越後への模索

一九六三年～一九六七年の記録より

谷川連峰・赤谷川笹穴沢

帝釽山脈の冬山を行く——はじめに

安ヶ森峠から枯木山

越後・巻機山 登川米子沢

一九六八年～一九七二年

充実していた遠き日々

一九六八年～一九七二年の記録より

伊沢 典雄

越後・三国川本流～下津川本流下降
越後・北ノ又川本流
越後三山縦走
越後・水無川北沢
越後・水無川真沢

124 122 120 118 113

105

103 101 99 97

92

88 80



越後・郡界尾根～越後駒ヶ岳 1975年11月

一九七三年～一九七七年

越後から飯豊へ

橋本道夫

一九七三年～一九七七年の記録より

積雪期縦走 越後三山・巻機山・白毛門山 はじめに

越後駒ヶ岳から巻機山縦走

郡界尾根から駒ヶ岳

奥利根源流の沢 はじめに

奥利根・利根川本流

裏越後沢中俣～越後沢右俣下降

奥利根・利根川剣ヶ倉沢

遠かつた平ヶ岳

越後・北ノ又川大ビラヤス沢

一九七八年～一九八二年

年報の記録より

一九七八年～一九八二年の記録より

田中茂雄

越後・五十沢川大窪沢左俣
越後・五十沢川大窪沢右俣
南アルプス・石空川北沢～ミツクチ沢
奥秩父・和名倉沢～滝沢下降
一九八一年秋の集中山行 浅草岳・鬼ヶ面山を巡る沢



虎毛山塊・春川万滝沢 1983年7月

鬼ヶ面山東面・只見沢トホケノ沢
鬼ヶ面山東面・只見沢滝沢
一九八三年～一九八七年

「わらじの五年間」

小宮 研一

一九八三年～一九八七年の記録より

阿武隈川本流雄滝

越後・佐梨川金山沢奥壁第三スラブ

一九八四年夏山合宿 黒雞川周辺の沢

北アルプス・黒雞川柳又谷本谷

ランダム自然人——三面川岩井又沢畠沢

南アルプス・石空川北精進ヶ滝

一九八七年夏山合宿・利根川源流域 チーフリーダー代理総括報告

奥利根・越後沢中俣

一九八八年～一九九二年

柳沢 英市

一九八八年～一九九二年の山行を振り返る

一九八八年～一九九二年の記録より

一九八八年～一九九二年の山行を振り返る
越後・北ノ又川芝沢左俣右沢
南アルプス・甲斐駒ヶ岳魔利支天中央壁クラックルート他
北アルプス・雲ノ平～高天原～黒部源流山スキー
谷川連峰・一ノ倉沢本谷～本谷バンド



信越・清津川長尾沢 1998年9月

北アルプス・白馬岳周辺山スキー

信越・鳥甲山カネグラ尾根

越後・五十沢川本谷

一九九一年～一九九五年

一九九一年から一九九五年を振り返って

一九九三年～一九九五年の記録より

村山秀人

そんなバカな 谷川・幽ノ沢ここのはどこ尾根

北アルプス・槍ヶ岳北鎌尾根

川内・早出川中杉川「Heaven!!中杉川」

一九九五年冬山合宿 はじめに

北アルプス・剣岳小窓尾根～早月尾根

一九九六年～二〇〇〇年

山に通い続けた入会からの五年

一九九六年～二〇〇〇年の記録より

須田忠明

252

北海道・日高チロロ川～ポンチロロ川

頸城・戸隠山P1尾根

毛猛山塊・只見川大熊沢立柄沢右俣～中ノ沢左俣下降～二ノ沢～

毛猛山～前ノ沢下降

頸城・能生川イカズ谷

二〇〇〇年秋の集中総括

274 271 267

264 261

248 247 244 241 236

228

224 222 219

二〇〇〇年秋の集中 毛猛山塊・黒又川中岩沢西ノ沢

二〇〇一年～二〇〇五年

斜陽

二〇〇一～二〇〇五

遠藤淳

二〇〇一年～二〇〇五年の記録より

屋久島・宮ノ浦川～宮ノ浦岳～小楊子川下降
下田川内・早出川本流～割岩沢～矢筈岳～大川東又沢下降
越後・三国川ダム～下津川山～小穂口沢北沢南沢中間尾根～ブナ沢～十分沢

利根川横断～歩き尾根～平ヶ岳～荒沢岳～蛇子沢左俣～明神峠～大湯
和賀山塊・真木渓谷～和賀岳～朝日岳～五番森手前～赤渕
二〇〇五年冬の集中 海谷・駒ヶ岳・音坂～烏帽子岳～海川横断～
駒ヶ岳～同西尾根

二〇〇六年～二〇〇七年

遠藤徹

二〇〇六年～二〇〇七年の記録より

わらじの五十年、最後の二年
二〇〇六年～二〇〇七年の記録より
阿能川岳北東尾根ひとりばっち
奥多摩・小川谷悪谷
自神山地・暗門川フガケ沢(西股沢)～赤石川ヤナダキ沢下降～赤石川本流～
石ノ小屋場沢～大川支流才口の沢下降～オリサキ沢下降～大川



越後・登川金山沢 1999年9月

追悼 八人の仲間が遺していったもの

第五章

OB・現役から わたしが創ったわらじ五十年の歴史

月報「図書室」に載った一文=松川一男
わらじのバッジのこと

地域研究点描

総務雑感

初合宿 “御神楽岳” の思い出

地下足袋 & 長靴

故郷への山旅——亡き父と山への想い

懸垂下降

わらじ回想

月山、鳥海山スキー

俺もわらじも五十歳

1990.5.12

わらじの仲間が好きだ
活動をふりかえって
わらじと山とわたし
百周年によせて



川内・杉川本流 2003年9月

畠 三 鈴 大 伊 遠 太 寺 田 小 山 小 富 橋 永 関
山 好 木 津 藤 藤 田 沢 中 林 口 原 張 本 瀬 根
健 恭 辰 政 泰 玲 隆 義 尚 太 保 幸 次
一 子 郎 雄 造 徹 栄 子 子 德 清 隆 樹 郎 夫



南会津・丸山岳 2007年5月

第六章
地域別山行一覧 わらじの仲間

「わらじの仲間の守・破・離」
わらじとの十年間
わらじ五十周年にあたつて
わらじ五十周年に寄せて
五十一周年のわらじ
わらじの仲間に入会して

五十年間の足あと

北 海	朝 日	連 峰	道
南 川	内 ·	下 田	
谷 川	会 津		
奥 利 根	· 卷 機 山		
那 須 · 男 鹿	· 塩 原	· 帝 稽	
奥 秩 父 · 大 菩 薩	丹 泽		
北 ア ル ピ	八 岳		
外 ス ス	ス 岳		

433 429 425 421 418 413 410 405 397 392 387 382 379

東 北 (朝 日 · 飯 豊 を 除 く)	須 田 忠 明
越 後 三 山 · 荒 沢 岳	熊 倉 彰
上 信 越 国 境 · 上 州 の 山	矢 本 和 彦
谷 川 岳	渕 上 麻 衣 子
日 光 · 足 尾	岩 崎 永 晶
奥 多 摩 · 奥 武 藏	須 田 忠 明
道 志 · 御 坂 · 他 東 京 周 辺	岩 崎 永 晶
頸 城	須 田 忠 明
中 央 ア ル ピ	須 田 忠 明
関 西 · 九 州	須 田 忠 明